

保育における根本考察と現実化（如是我聞）

河邊 杲

普遍性や論理性の追及という近代科学思想が、その発展過程で、人類の幸福と利益をもたらした反面、地球規模の公害等数多くの負の課題を残したまま、あと五年で二世紀を迎えねばならない。学校教育、なかなしく保育においても、その渦中にある事実を見逃すことはできない。例えば深刻化しつつある登園（校）拒否・暴力・いじめ等々の課題は、このことを物語っていて看過できない。

私はここにこのことに関連して二つの問題についての根本考察とその現実化が緊急に必要だと思ふ。その一つは、保育活動において、その対象としてい

る幼児とその成長発達を助長する役割をもつ保育者とが、相互にそれぞれが50%・50%の責任を持っているかどうかという問題である。保育を「教える」こと、「導く」ことととらえれば、保育者は100%の責任を背負うことになる。ひとりひとりの幼児が成長力を持ち、同時に異質であることを認めれば、その保育環境も、活動の場も、両者の関係も、少なくとも公式化し得るものではない。ひとりひとりが成長しようとする力を十分に発揮し得るように（両者がそれぞれに50%の責任を果たすことになる）援助していくことにより、はじめて保育は成立する。幼

児（人間）に成長力があり、これを尊重して保育をすることは論理的にはよく理解されているが、実際となると観念的、概念的なものとしてすり変わってしまっている事実が問題だと思う。私は「幼児との保育」ということばで、ことある毎にその必要を説いて来た。倉橋惣三氏の言を借りるまでもなく、「安易なことではないが、真の保育であればこの方向へ保育を推進していかねばならない」と私も思う。

今一つの問題は、幼児に接する時、対象の幼児に對して「なぜそういうことをするのだろうか」と考へ込んでしまっている事実についてである。そしてこのことを問題にすることが「幼児理解」であるかのように錯覚されているのではと思われる実践報告に度々出会う。これは従来からの学校教育観の根底にあるニュートン物理学でもみ出された決定論にもとづくものだと言って過言ではない。なにか因果関

係を観念的につくり結果を結びつけようとすることで、恐らく多くの保育者は考えれば考える程、手足がでなくなってしまう。少しも気がかりは解消していかない。昨夏、ある研究会でこのことの矛盾に気付いた先生が、二学期後の実践で、子どもへの接近と接触がスムーズにでき、子どもと新しい出会いを経験しているのを見聞している。そして担任が気にしていたことは、いつの間にか解消してしまっていると報告を受けた。

以上、保育におけるその本質にかかわる根本問題が現実化されずに今日まで「難しいことだ」として事実についての十分な実践的追究がなされずに来ている。研修会などで観念の承りとやりとりに終始している研修にも問題があり、根本的な改革をしていかねばならないのではなからうか。

（元・洗足学園短期大学）